

四国遍路道研究会報告（第12回）

四国遍路みちにおける、「へんろ転がし」の工学的研究

四国遍路みち研究会

・室戸岬国道55号～第24番札所最御崎寺（ほつみさきじ）

（第16回現地調査 2024.6.11）

この区間のへんろ転がし調査は当初計画になかったが、徳島23番札所薬王寺から長い長い歩き遍路最終区間の急勾配箇所であり、へんろ転がしに該当するというので実施。

令和6年6月11日8時半にクリエイト協会を出発、高松・高知及び国道55号経由、道の駅で情報収集後、キラメッセ室戸で昼食をとる。途中、高知東部自動車道の高知空港ICから香南のいちIC間は、来年の春の接続予定と聞いており、その進捗には目を見張るものがある。

四国地方の梅雨入りは今年は6月9日であり、前日の8日は四国全域で大雨が降った。ましてや雨の



室戸国道55号と登り口



御厨人窟（みくろど）

多い室戸の

へんろ転がしであり、空模様と路面状態が気になったが天気は晴れ、久々の室戸の潮風もそこそこに、国道から札所への登り口を探す。この24番札所と23番札所薬王寺間は75.6kmある。全四国遍路区間の中でも、37番札所岩本寺から38番札所足摺の金剛福寺間の82.4kmに次ぐ二番目に長い区間である。薬王寺から南下し海陽町に至る区間は部分的に国道55号以外の区間があるが、それより南は昭和40年代の直轄

国道一次改築事業で整備済の国道55号が大部分を占めている。当該区間には海岸急峻地形が多く、その昔のおへんろさんは海岸砂利浜を潮待しながら波打ち際伝いに歩いていて、干満の時間が合わず水難事故に遭遇したとの記録も残る。札所に先行して、弘法大師が悟りを開いたという御厨人窟（みくろど）にも参拝した。

登り口の話に戻そう。今年は閏年で逆打ちの年であり、室戸市街から北上したこともあり、室戸岬灯台



へんろ道調査状況（コンクリート階段）



への案内は確認出来たが、札所への入口らしい脇道を探すが中々見つからない。結局地元の方に道を尋ねて前述の灯台登り口から登り始めると、法面の小段みたいところに立派な案内石柱が立っており、「最御崎寺本堂695m 約20分」とある。国道からの標高差約180mの直坂道600m、平均勾配23%程度であるが、階段はより急勾配のジグザグのつづら折りの連続であり、構造的には登り口側の約下半分は、幅120cm弱の不規則な歩幅間隔の古いコンクリート階段で水路などはない。中間点より上側に休憩所があったが傷みが酷く、これより上側の道は地肌に見える石積階段であった。雨の多い室戸地区でのへんろ道保全には

ご苦労が多いことを痛感した。道の両脇は、自然林の広葉樹が主で低木には観葉植物の部類も多く見られ、疲れた歩きへんろの心やすめにもなるのでは・・・。

今回のへんろ転がし現地調査は、区間としては短く、縦断勾配もジグザグの連続であったが特筆するほど大変ではなかった、要は、長い歩きへんろ区間の最終地点での急勾配区間として他の区間と趣が違った。四国遍路の世界遺産登録に向けては、周りの自然保全は問題ないが、へんろ道構造としてのコンクリート建造物の自然素材での修復などが課題となると思う。

調査を含めスローペースであったものの約40分後には山門前到着。参拝の前に山門南の室戸岬灯台から太平洋を眺望、若干の曇り空であったが地球が丸いという体感に浸り、へんろ転がしの疲れが一気に吹っ飛んだ。

第24番札所最御崎寺に参拝する。ここのお寺は春先にはヤッコ草の群落が有名だが、今回はシーズンオフ。そこそこにお参りを済ませ、先行して回送してくれた会有車で、本日の宿の高知市に向かう。午後6時前に宿につく。早速の反省会となり、四国遍路の世界遺産登録への一助になればと、今後とも「へんろ転がし」調査の機会発掘と広報活動の必要性について語り合いながら盃を交わした。



最御崎寺山門前調査団